

思春期体験学習の効果を評価する質問票の作成 —多面的イメージ評価の試み—

研究協力者 宮谷真人
(広島大学教育学部)
共同研究者 大日向雅美(恵泉女学園大学人文学部)
田中義人(広島大学医学部)
松橋有子(広島大学教育学部)

はじめに

思春期における赤ちゃんとの触れ合い体験学習の短期的および長期的な効果については、今までにも様々な質問票を用いて測定が試みられてきた。その中には大抵、「赤ちゃん」や「育児」に対する印象やイメージの変化を調べるための質問項目が含まれている。その多くは、実施や集計の簡便性のために、例えば赤ちゃんの印象について、「かわいい」、「やかましい」などいくつかの選択肢の中から一つを選択させるというような方法を取っているようである。しかし、人がある対象に抱くイメージは必ずしも一面的ではなく、「やかましい」けれども「好きだ」というように否定的側面と肯定的側面が同時に存在しうる。したがって、体験学習の効果をより詳細に捉え、さらに体験学習が出産や育児などの行動にいかなる心理的機序で影響を及ぼすのかを調べようとする、それらの対象に対するイメージの多様な側面を評価しうる方法が必要である。

本研究は、赤ちゃんや育児に対するイメージを多面的に捉えるための質問票を作成することを目的として行った。第一に、心理学におけるイメージ調査等でよく用いられる手法であるSD法(Semantic Differential法)によって、赤ちゃんや育児、あるいは父親、母親に対するイメージが、どのような側面から構成されているのかを調べた。第二に、それらの側面と、出産や育児に関する意識や行動と関係すると思われるいくつかの心理学的特性との関連について調べた。第三に、体験学習によって赤ちゃんや育児に関するイメージのどの側面がどのように変化するのかを調べた。これらの結果に基づいて、体験学習の効果を効率的に測定しうる質問票を作成する予定であるが、第三の点については、調査対象とした学校のカリキュラム等の関係で現在も調査を継続中であり、本稿では主として第1と第2の点について報告する。

調査 I

調査Iでは、赤ちゃんや育児に対するイメージがどのような側面(因子)から構成されるのかをSD法によって調べた。

1. 方法

対象と実施時期 1994年11月～12月に、広島市内の大学生を中心とする成人(18～47歳、平均年齢20.3歳)376名に対して調査を実施し、男性53名、女性316名から有効な回答を得た。

2. 調査内容

「赤ちゃん」、一般的な意味での「母」と「父」、「育児」の4つの概念について、表1に示す31の形容詞対(尺度)を用いてイメージを尋ねた。各概念のそれぞれが、例えば「非常に明るい」から「非常に暗い」までの7段階のどこに当てはまると思うかを直観的に答える方法で、回答を得た。調査票の配布、記入、回収は、講義時間等を利用して集団で行った。

3. 結果

各尺度における評定を1～7点で得点化(得点が低いほど肯定的評価)し、4つの概念をこみにして因子分析(反復主因子解、共通性の推定値はSMC、3因子を抽出後バリマックス回転)を行った。各尺度の因子負荷量を表1の中欄に示す。第1因子では、尺度18(生き生きした—生氣のない)、10(夢がある—夢がない)、7(生きがいのある—生きがいのない)などの負荷量大きい。さらに尺度29(活発な—不活発な)、31(おもしろい—つまらない)も大きな負荷量を示しており、これらの結果から、第1因子は現在の活動性と将来の発展・発達の可能性の両方を含んだ「力動感」因子であると考えられる。第2因子は、尺度12(責任がある—責任がない)、14(強い—弱い)、28(大きい—小さい)などの負荷量が特に大きく、「自立感」因子であると言える。第3因子は、

表1 イメージ評価に用いた尺度と抽出した因子

尺 度 (形容詞対) (※は調査票では左右が逆)	因子負荷量					
	調査1			調査2		
	第1因子 (力動感)	第2因子 (自立感)	第3因子 (不安感)	第1因子 (力動感)	第2因子 (自立感)	第3因子 (不安感)
1 明るい-暗い	0.5146	-0.1529	0.4917	0.6686	-0.2755	0.1817
2 ※あたたかい-つめたい	0.5355	0.0060	0.3825	0.6198	-0.0309	0.1414
3 ※不安でない-不安である	-0.1097	0.3539	0.5964	-0.0062	0.1783	0.6942
4 ※楽しい-苦しい	0.3340	-0.0787	0.6256	0.4902	-0.2032	0.4386
5 将来の目標がある-将来の目標がない	0.6226	0.0835	-0.1440	0.4214	0.3023	-0.2869
6 ※充実している-空虚である	0.5043	0.3378	0.1249	0.5093	0.3403	0.0295
7 生きがいのある-生きがいのない	0.6619	0.1686	-0.0241	0.5360	0.3021	-0.1692
8 自信がある-自信がない	0.1630	0.4371	0.3476	0.1536	0.3187	0.4842
9 ※自立している-自立してない	-0.0950	0.7109	0.1179	-0.0986	0.6761	0.3212
10 夢がある-夢がない	0.7201	0.0179	-0.0280	0.5905	0.0883	-0.2902
11 好き-きらい	0.5858	0.0434	0.3831	0.5936	0.0593	0.2537
12 責任がある-責任がない	0.0365	0.7976	-0.0817	-0.0003	0.7624	0.0650
13 ※落ちついた-にぎやかな	-0.4040	0.4571	0.0545	-0.3912	0.4758	0.2956
14 強い-弱い	-0.0535	0.7751	0.0499	-0.0605	0.7130	0.2727
15 ※のびのびした-きゅうくつな	0.4430	-0.2849	0.4786	0.5203	-0.3883	0.2184
16 ※おだやかな-はげしい	0.1778	0.0843	0.3718	0.2258	0.0868	0.3451
17 ※やわらかい-かたい	0.4733	-0.4158	0.3201	0.5236	-0.4878	-0.0666
18 生き生きした-生気のない	0.7672	-0.1453	0.1623	0.7447	-0.1807	-0.1176
19 ※地味な-派手な	-0.2877	0.2458	-0.0622	-0.3069	0.3434	0.0441
20 ※安定した-不安定な	-0.0771	0.6699	0.3725	-0.0627	0.5320	0.6343
21 美しい-きたない	0.4889	-0.0996	0.2739	0.5183	-0.0216	0.0525
22 知的な-知的でない	0.2237	0.5723	0.1002	0.1665	0.6123	0.2349
23 複雑な-単純な	0.0969	0.4566	-0.3958	0.1091	0.4686	-0.3049
24 ※重い-軽い	-0.0844	0.5968	-0.2613	-0.1010	0.6073	-0.0084
25 良い-悪い	0.5185	0.1158	0.3346	0.5678	0.1983	0.1490
26 考え深い-衝動的な	0.0656	0.6412	-0.1283	0.0238	0.7125	0.0540
27 ※価値がある-価値がない	0.4872	0.2318	0.0748	0.4112	0.1999	-0.0001
28 ※大きい-小さい	-0.0119	0.7602	0.0205	-0.0743	0.7595	0.1712
29 活発な-不活発な	0.6287	-0.1602	0.1159	0.6113	-0.1992	-0.1035
30 ※陽気な-陰気な	0.5560	-0.1091	0.3991	0.6510	-0.2744	0.1461
31 おもしろい-つまらない	0.6496	-0.0789	0.3387	0.7133	-0.1782	0.1278

尺度4(楽しい-苦しい)、3(不安でない-不安である)の他、尺度1(明るい-暗い)や15(のびのびした-きゅうくつな)などの負荷量が大きく、漠然とした「不安感」を表す因子ではないかと考えられる。

調査 II

調査 I で行ったイメージ測定の結果が、調査対象を変えても安定して得られるかどうかを確認し、さらに、抽出された各因子が、出産や育児に関する意識や行動と関係するであろう心理学的特性とどのように関連するかを調べるために、調査 II を行った。

1. 方法

対象と実施時期 1994年12月~1995年1月に、東京都および広島県内の大学生・短大生(18~23歳、平均年齢19.3歳)635名に対して調査を実施した。東京地区の女性176名、広島地区の女性213名、広島地区の男性240名から有効な回答を得た。

調査内容 調査 I で用いたイメージ評価に加え、山口(1985)による男性性・女性性の2側面に関する質問項目を加え、さらに、将来子供が欲しいかどうか、欲しいとしたら何人くらい欲しいかを尋ねた。なお、山口による質問項目からは、母性性、女性性(男に対する女として)、父性性、男性性(女に対する男として)、大人性(大人として男女に共通して求められる特性)の5種類の得点が算出される。

2. 結果

4つの概念に関するイメージ評価について、調査 I と同様の方法で因子分析を行った。各尺度の因子負荷量を表1の右欄に示す。さらに各概念の各因子ごとに因子得点を求め、図1と表2に示した。図1は性と地区をこみにした、表2は性、地区別の結果である。表中の数字は、値が小さいほど肯定的な意味(力動的、自立的、不安でない)をもつ。表2には、各因子得点と、母性性、女性性、父性性、男性性、大人性(各得点の性・地区別平均値と各得点

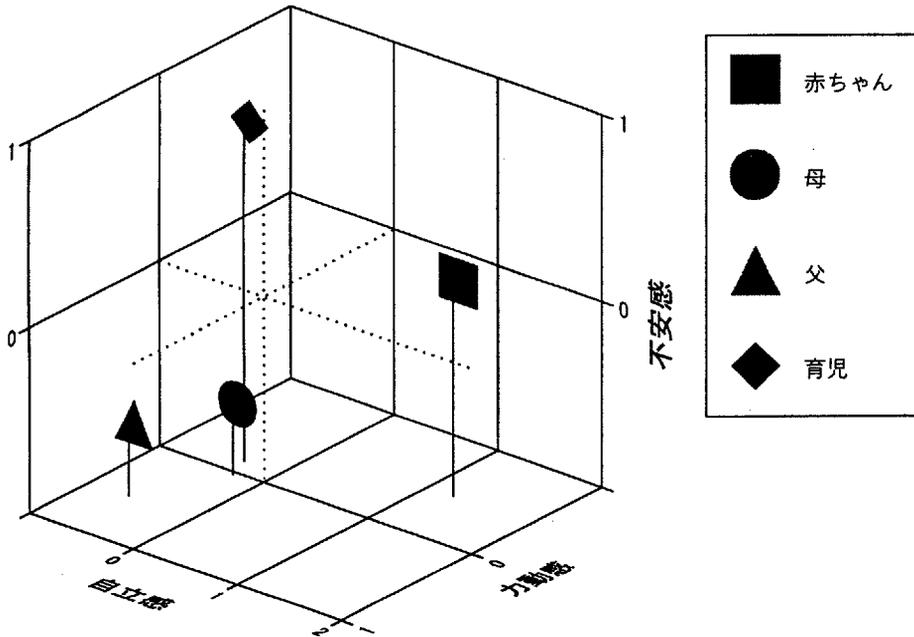


図1 「赤ちゃん」「母」「父」「育児」のイメージ空間

た。これは赤ちゃんや育児などに対するイメージの形成において、知識や経験の有無や多少による不安感の相違が大きな役割を果たすことを示唆するものであり、興味深い。図1をみると、「育児」イメージは不安感因子について他の概念と際だって異なっており、「赤ちゃん」イメージは自立感の低さと不安感の高さで特徴づけられることがわかる。

間の相関係数を表3に示す)、年齢、欲しい子供の人数(全体の平均は1.95人)との相関係数も示してある。なお、将来子供が欲しいかどうかの質問に

体験学習の効果を評価するための質問票には、実施の手間等を考えると、あまり多くの項目を盛り込むことはできないであろう。調査IとIIの結

表2 各概念の因子得点と他の諸特性との関係

概念	因子	平均得点					相関係数(ピアソンのr, 絶対値が0.1以下のものは省略)						
		東京地区女性	広島地区女性	広島地区男性	地区差	性差	母性性	女性性	父性性	男性性	大人性	年齢	子供数
赤ちゃん	力動感	-0.55	-0.53	-0.34		**	-0.363	-0.212	-0.182		-0.343		-0.309
	自立感	1.29	1.07	1.38	**	**							
	不安感	0.09	0.29	0.24	**		-0.126						-0.144
母	力動感	-0.04	-0.06	0.17		**	-0.309	-0.193	-0.214		-0.280		-0.201
	自立感	-0.29	-0.33	-0.18		**	-0.231	-0.154	-0.200		-0.254		-0.140
	不安感	-0.55	-0.61	-0.54							-0.102		
父	力動感	0.46	0.59	0.56			-0.233	-0.176	-0.214		-0.192		-0.178
	自立感	-0.73	-0.52	-0.64	**		-0.227	-0.105	-0.232		-0.332		-0.173
	不安感	-0.58	-0.59	-0.47		*	-0.153	-0.114					
育児	力動感	-0.11	-0.12	-0.14			-0.358	-0.129	-0.253	-0.130	-0.348		-0.355
	自立感	-0.46	-0.42	-0.18		**	-0.257	-0.150	-0.149		-0.272		-0.165
	不安感	0.88	1.00	0.79		**							

(*: p<.05, **: p<.01)

対しては86.5%が「欲しい」と答え、他の質問項目との関連は調べることができなかった。

3. 考察

調査IIのイメージ評価の結果は調査Iとよく似ていた。さらに、4つの概念別に同様の因子分析を行った結果、各尺度の因子負荷量の大小については多少違いがあるものの、因子としては同様なものが抽出された。SD法を用いたイメージの測定では、一般に「評価」、「力量」、「活動性」の3次元が抽出される。調査IとIIで抽出された「力動感」は「活動性」に、「自立感」は「力量」にほぼ対応すると考えられる。「評価」に相当する因子は認められず、かわりに漠然とした「不安感」を表す因子が抽出され

果を比較すると、各因子に対して大きな因子負荷量を示す尺度もよく一致しており、「力動感」については尺度18、29、31、「自立感」については尺度12、14、28、「不安感」については尺度3を用いて質問することで、少ない項目でもある程度多面的な評価が行えると考えられる。

出産や育児に関する意識や行動は、性、地区(周囲の情報の質や量、あるいはライフスタイルの違いを媒介として)、あるいは母性性、大人性などの心理学的特性と関連すると思われる。表2をみると、それらのどの要因とも関連しない概念あるいは因子はなく、この点で体験学習の効果を評価するための質問票に取り入れなくてもよい概念・因子を指摘することはできなかった。

表3 男性性・女性性の2側面測定の結果

	母性性	女性性	父性性	男性性	大人性	
広島地区	36.5	32.5	33.1	28.0	41.5	平均得点
東京地区	36.2	33.0	31.7*	28.1	43.7**	
女性	36.5**	32.5**	33.1**	28.0	41.5	* : t-test 有意 (p < 0.05) ** : t-test 有意 (p < 0.01)
男性	31.4**	25.7**	37.3**	33.9**	40.9	
女性性	.652					相関係数
父性性	.352	.233				
男性性	.149	.103	.647			
大人性	.586	.449	.478	.361		
年齢	-.012	.029	.067	.047	.043	
欲しい子供の人数	.377	.127	.226	.117	.281	

調査 III

体験学習の効果を敏感に反映する質問項目を選定する目的で、体験学習に類似する経験である保育実習の前後の赤ちゃんイメージの変化を、調査 I・II と同じ尺度を用いて測定した。

1. 方法

対象と実施時期 保育実習(1994年12月に実施、幼稚園児対象)を受講した女子大学生(20~21歳)20名に対し、実習の前後に同一のイメージ調査を実施した。両方の調査で回答が得られた16名を分析の対象とした。

調査内容 用いた尺度は調査(II)と同じであるが、実施時間の制限もあり、「赤ちゃん」と一般的な意味での「親」の2対象について回答を求めた。

2. 結果

調査 I と同じ方法で各概念の各尺度ごとに得点を求め、実習前後の変化を調べた。対応のあるt検定の結果有意差が認められたものを表4に示した。

表4 保育実習の前後で評定が変化した尺度と因子

「赤ちゃん」のイメージ									
	尺度 (番号の意味は表1を参照)								因子得点
	1	13	14	15	17	20	21	29	不安感
実習前	2.06	5.56	5.31	1.94	1.69	5.44	2.63	2.25	-0.248
実習後	1.50	6.25	4.06	1.50	2.00	4.69	3.44	1.69	-0.529

「親」のイメージ									
	尺度 (番号の意味は表1を参照)								因子得点
	5	6	14	23	26	-	-	-	自立感
実習前	3.13	2.06	2.75	3.38	2.75	-	-	-	-0.786
実習後	2.50	1.63	2.06	2.81	2.00	-	-	-	-1.062

表4の数値は、値が小さいほど評価が肯定的であることを示す。赤ちゃんに対するイメージは、より

明るく、にぎやかで、強く、のびのびとして、かたく、安定し、きたなく、活発な方向に変化した。親に対するイメージは、将来の目標があり、充実し、強く、複雑で、考え深い方向に変化した。

因子得点の推定値を求めるための重み係数として、調査 I で得られたものを用い、調査 III の各概念について因子得点を求めて、実習の前後で比較した。赤ちゃんについては「不安感」因子の得点が不安でない方向に変化し、親については「自立感」因子の得点がより力強い方向に変化した。(図2.矢印の起点が実習前のデータ、終点が実習後のデータを表す)。

3. 考察

表4から、わずか回の実習体験でも、赤ちゃんや親のイメージが少なくとも短期的には様々な側面で変化したことがわかる。各尺度ごとの変化と因子得点の変化を比較すると、尺度14、23、26における親イメージの変化を、自立感の側面での変化として一括して捉えうる点は、SD法・因子分析法を用いた多変量的アプローチの有効性を示すもの

である。また、尺度3だけでは捉えられなかった赤ちゃんに対する不安感の変化を、因子得点によっ

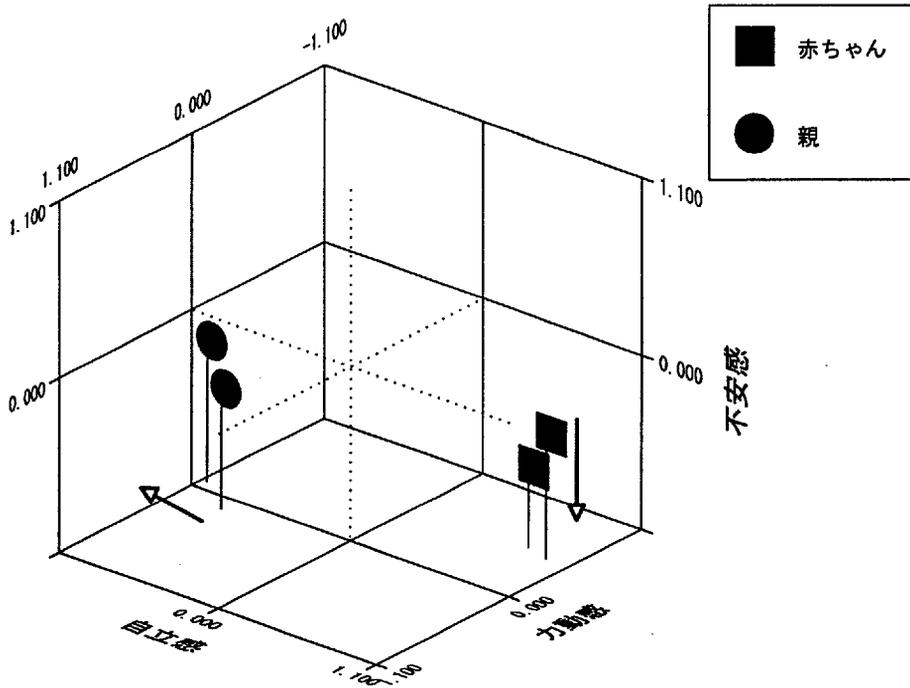


図2 保育実習前後の「赤ちゃん」と「親」のイメージ変化

て明らかにすることができた。ところが、その反面、力動感因子との相関が強い尺度5や6における親イメージの変化が因子得点には反映されていないなど、因子得点だけでは見逃してしまう変化もある。どのような質問項目を組み合わせ、どのように集計するのが有効であるのかについては、現在継続中の調査の結果をみて判断したい。

触れ合い体験学習の効果は、本人や相手の年齢、体験の内容や期間、また学習後の時間経過によって、量的にも質的にも変わるであろう。したがって、その効果をよく反映させるためには、質問票の内容もきめ細かく変える必要があるのかもしれない。調査Ⅰ・Ⅱで、多面的測定のために適切

であると考えた尺度の中には、体験学習による変化に敏感な項目(例えば尺度14)も、そうでない項目もある。適切な質問項目の選定に当たっては、何が変化するかを探るという観点と同時に、どのような変化を捉えるべきなのか、すなわち、体験学習が何を目指し、何がどのように変化すれば効果があったと判断してよいのかという観点からの考察も必要であろう。

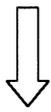
文献

山口素子 男性性・女性性の2側面についての検討、心理学研究、56:215-221, 1985



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

思春期における赤ちゃんとの触れ合い体験学習の短期的および長期的な効果については、今までにも様々な質問票を用いて測定が試みられてきた。その中には大抵、「赤ちゃん」や「育児」に対する印象やイメージの変化を調べるための質問項目が含まれている。その多くは、実施や集計の簡便性のために、例えば赤ちゃんの印象について、「かわいい」、「やかましい」などいくつかの選択肢の中から一つを選択させるというような方法を採用しているようである。しかし、人がある対象に抱くイメージは必ずしも一面的ではなく、「やかましい」けれども「好きだ」というように否定的側面と肯定的側面が同時に存在しうる。したがって、体験学習の効果をより詳細に捉え、さらに体験学習が出産や育児などの行動にいかなる心理的機序で影響を及ぼすのかを調べようとすると、それらの対象に対するイメージの多様な側面を評価しうる方法が必要である。

本研究は、赤ちゃんや育児に対するイメージを多面的に捉えるための質問票を作成することを目的として行った。第一に、心理学におけるイメージ調査等によく用いられる手法であるSD法(Semantic Differential法)によって、赤ちゃんや育児、あるいは父親、母親に対するイメージが、どのような側面から構成されているのかを調べた。第二に、それらの側面と、出産や育児に関する意識や行動と関係すると思われるいくつかの心理学的特性との関連について調べた。第三に、体験学習によって赤ちゃんや育児に関するイメージのどの側面がどのように変化するのかを調べた。これらの結果に基づいて、体験学習の効果を効率的に測定しうる質問票を作成する予定であるが、第三の点については、調査対象とした学校のカリキュラム等の関係で現在も調査を継続中であり、本稿では主として第1と第2の点について報告する。